

歴史の中の女たち

<第17回>

アナとベルナルディーナ
— ウルグアイの独立 —

伊藤 滋子

アナ・モンテロソはバンダ・オリエンタル（＝ラプラタ河東岸）と呼ばれていたウルグアイのモンテビデオに生まれた。スペイン人の父は商人で、カビルド（市議会）の役人でもあった。18世紀末のその頃、バンダ・オリエンタルはヨーロッパから入ってくる新しい思想や通商を通じて文化が成熟し、急速に発展していた。家畜の宝庫である大平原にはスペインをはじめヨーロッパ各地からの移民が続々と流入、ラプラタ河中の港町モンテビデオはブエノスアイレスにつぐ商業都市として繁栄し、城壁で囲まれた町は縦横それぞれ40本の通りを有し、コロニアル風の村から近代都市へと変貌しつつあった。市民は外来の客を暖かく迎え、おしゃべりや音楽、ダンスに興じる気の張らない集まりがいつもどこかで開かれているほど社交好きだった。教会とカビルドの間にある広場は午後になると着飾った婦人たちが扇子をはためかせて行き交い、「この女性フランスの女と同じぐらい自由だ」と、旅行者を感嘆させている。

1810年に起こった5月革命でブエノスアイレスからスペイン人勢力が追放されると、モンテビデオはラプラタ地方におけるスペイン最後の拠点となった。翌年、アナの母方の親戚であるアルティガスが少数の兵を率いてブエノスアイレスからバンダ・オリエンタルに攻め入り、モンテビデオを包囲、独立をめざす革命を起こした。アナが20才の時であ



アナ・モンテロソ・デ・ラバジェハ

る。父はスペイン人の役人であるにも拘わらず革命を支持したため、包囲が始まるとブエノスアイレスに亡命した。神父だったアナの長兄もまた、僧服とコルドバ大学の神学教授の職を捨ててアルティガスの秘書となり、政治・社会思想の面から革命を支えるという、自由主義を奉じる一家であった。

モンテビデオがアルティガス軍に包囲されると、副王は同じイベリア半島の王国ポルトガルが支配するブラジルに援助を求めた。ブラジルは常に領土をラプラタ河まで拡大しようとしていたからそれは絶好の機会であったが、この時はブエノスアイレスが断固たる態

度をとったために兵を引きあげた。しかしバンダ・オリエンタルを自国領に取りこもうとするブラジルとアルゼンティンの攻防は一段と激化する。実際アルゼンティンはすぐさまそれを実行に移し、独立を守ろうとしたアルティガスがそれと戦っている隙をついて、再びブラジルはバンダ・オリエンタルに侵攻し、1817 年そこをブラジル領シスプラティーナ地方と名付けて自国に併合してしまった。

26 才のアナがフアン・アントニオ・ラバジェハと結婚したのはその半年後である。彼は牧畜業を営む裕福なスペイン人の家に生まれ、高等教育は受けていないが、他のカウディーヨ（首領）たちと同じく仕事を通じてあらゆることを学んだ。アルティガスが蜂起するとすぐにその軍に入り、この時 33 才、性格は開けっぴろげで朗らか、誠実な好人物であった。アナの父は 2 年前に亡くなっており、彼女は妹と母とともにラバジェハ家のあるミナスに赴き、結婚式を挙げた。しかし当の花婿はアルティガスの命でブラジル軍と戦っており、不在の彼に代わって上官でのちに初代大統領となるフルクトウオソ・リベラが代理を務めた。ラバジェハと彼はともに独立の戦いに身を投じて固い友情で結ばれながら、その後は権力と支配をめぐる対立する。

アナが結婚して 5 カ月後、ラバジェハはブラジル軍に捕らわれて、リオデジャネイロに送られることとなった。それを知ったアナは彼の妹と共にブラジル軍の指揮官のもとに赴き、夫の元に行かせてほしいと頼んだ。二人は他の捕虜の家族とともにブラジル軍の船に乗せられてウルグアイ河を収容所に向かう。ラバジェハがその船に連れてこられた時、捕虜には足枷をつけるように命令されていたにも拘わらず、ブラジル軍の海軍士官はすぐにそれを外し河に投げ捨ててしまった。両軍の指揮官の間にはまだ騎士道精神が生きていた

ようだ。夜も遅く、船室に導かれたラバジェハはそこに安らかに眠っている妻と妹を見て驚いた。彼らはそのまま船でリオデジャネイロに連行され、コブラ島で 3 年間の捕虜生活を送る。その間に 2 人の子供が生まれ、解放されて帰国する船上でも出産し、その後も夫が政治、軍事で忙殺されている間にアナはせっせと子供を生み続け、10 人を出産した。

ブラジル領シスプラティーナに帰ったラバジェハは牧畜の仕事に戻るが、3 年後、再び独立革命を志し、アルゼンティンに亡命して蜂起の準備に入る。1825 年 4 月、彼は 33 人のウルグアイ人亡命者を率いて小舟でウルグアイ河を渡りソリアノに上陸、これにリベラやオリベらのカウディーヨが呼応して次々と町を解放し、ブラジル軍は城壁で守られたモンテビデオとコロニアの町にたてこもった。そして遂に 8 月 25 日フロリダで念願の独立宣言が行われた。戦闘はそれからも続いたが、イギリスの仲介によりブラジルとアルゼンティンの間に講和条約が締結されて、1828 年ようやくブラジルの支配は終り、ウルグアイの独立が確定する。1830 年には憲法が制定され、リベラが初代大統領に選出された。しかし行政や経済は機能せず、独立の戦いの過程における対立の恨みも尾を引いていた。地方では土地の所有権も曖昧でカウディーヨたちが幅をきかせている。国境もまだ確立しておらず、中央ではリベラ、ラバジェハ、オリベなどが権力をめぐって互いに争っていた。ブエノスアイレス、ラプラタ各地、ブラジル、英、仏などの諸外国の介入がこの混乱に拍車をかけ、ついに 1839 年から 51 年まで、ウルグアイは『大戦争』と呼ばれる内乱状態に陥った。

この中でラバジェハは常に重要な立役者の一人であったから、アナも夫を助けて政治に深く関わる。それは内助の功にとどまらず、

計画を練り、情報を把握し、命令を下すことまでであった。ことに夫が亡命中などは自分の署名が入った過激なパンフレットを作り、自宅で秘密集会を開いて支持者を集め、彼女自身が参加者に軍の位や報奨金を与え、彼らを組織して暴動を起こそうとした。それを察知した政府は男性の首謀者を投獄し、女性を病院に監禁しようとした。この時子供たちに取り囲まれたアナは、「私をこの子たちから引き離すのなら、まず私を殺しなさい」と言って一步も譲らず、結局自宅幽閉となった。その後首謀者全員が財産を没収されたうえ追放されることとなり、アナは子供たちを連れてブエノスアイレスにいる夫の元へ行く。

残されている唯一の肖像画は壮年期を過ぎた頃のものと思われるが、意志の強さ、豊満で情熱的、エネルギーに富んだ性格を備えた彼女の面影が彷彿とする。政敵にとっては手ごわい相手であったことは確かで、「気難しい性格で女らしくない」「支配欲が強くラバジェハを委縮させ、彼を軟弱にした」「マキャベリズムの極致。欲望のために夫婦の運命を犠牲にすることもためらわない策略家」と酷評している。確かに彼女の行動的で強い女性というイメージは当時の女性像に反していた。しかしその一方で、「夫婦愛の代表的な形であった。強い決意で常に変わず夫が行く後を追った」「知性と行動力に富みながら、思いやりがあり、誠意をもって人に接する」あるいは「真摯な努力家そのもの、行動は常にこの上なく的確で、一刻の休息もなく、すべてを自分でやりとおす能力と努力は驚嘆に値する」と、彼女を称賛する評がある。

ラバジェハの友人であり、政敵であり、義兄弟（コンパードレ：子供の名付け親）であるリベラは、ある人物がアナの歓心を買おうとしていると聞き、「それができれば、ラバジェハを味方にしたも同然だ。アナを得るこ

とはすべてを得るということ」とまで言っている。妻に牛耳られる男を皮肉ったと聞こえなくもないが……。アナは夫との別居を余儀なくされることも多かったが、できる限り彼のもとに行き、亡命にも同行した。当時彼女ほどあちこちと居を移した女性はいなかったのではないと思われるほどだ。夫妻について新聞をにぎわしたエピソードがある。1828年リベラと和解しようとしたラバジェハは彼に長い手紙を書き、末尾に昔の親しさを思い起こさせるためか、「追伸：きれいなインディオ女を送ってくれ。お前にはわれわれ二人が知っている片目のフアナを送ってやるから」と書いた。誰のことを指すのかは不明だが、男同士の隠し事らしい。これを知るや、アナは急いで子供たちを引きつれて夫のいる野戦地に向かった。14頭の軍馬を使う許可書には彼女自身がサインしている。

一方アナの友人の、リベラの妻ベルナルディーナは男性が描く『理想の妻』に近い。田舎町のよろず屋の娘として生れ、無類の読書好きであったこの人は人間に対する深い洞察力を備えていたようだ。夫のリベラは「バンダ・オリエンタルで、誰が最高の馬乗りか、最高の牛飼か、あるいは誰が戦場では非情に敵を殺し、同胞をこよなく愛するか、誰が一番鷹揚か、誰が最も国を愛しているかを聞いてみたまえ。誰もが口をそろえて『リベラ將軍！』と答えるだろう。」と謳われた典型的なカウディーヨで、人を惹きつけ野戦に生きることを好んだ。彼の周りにはいつも勇敢な兵士とともに、女たちがいた。もちろんベルナルディーナのもとには夫の数々の情事の報が届くが、彼女は、兵士である以上ありがちなことと、怒りはするが赦す。リベラの自分に対するゆるぎない愛情を確信し、彼の「私は男だ、愛情と欠陥をもつ普通の男だ。しかし社会に対する責任を放棄したとは誰にも言



ベルナルディーナ・フラゴソ・デ・リベラ

わせない。特に君に対してはそうだ。君を愛し、これからも永遠に愛し続ける」という言葉を信じたからだ。自分が男の心の中に特別な地位を占めているという確信がなければとれない態度である。

彼女は子供をひとり生んだが幼くして夭折し、そのあと内乱で親を亡くした女兒4人を引き取って育てた。夫と交わした手紙にはよく彼女たちの話題がでてきて、ふたりが娘たちを育てることを喜びとしていたことがうかがえる。またベルナルディーナは夫が他の女に生ませた男児を養子にして母性愛を注いだほか、パラグアイへ亡命する前にアルティガスから託された彼の息子も家に引き取っている。カウディーヨの常としてあらゆる社会層の人々から名付け親になることを頼まれ、その子供たちの面倒もよくみており、彼女が書いたおびただしい数の手紙は、さまざまな要求に応じたり、人に援助を頼んだり、推薦や助言、あるいは叱責、仲介などの内容が多い。また内乱の負傷者のために病院を建てた

のをはじめ、終生慈善事業に尽くしたことは彼女の人柄をよく表わしている。

1830年リベラは初代大統領に就き、ベルナルディーナはファーストレディの役を献身的に務めた。威厳を保ちながらも特権意識や見栄とは無縁で、聡明な彼女はそんな地位がいかににはかないかも、友でさえいつも信頼できるとは限らないこともよくわきまえていた。1833年ラバジェハが反乱を起こした時はリベラに静観を勧めた。「お手紙拝受しました。貴方がおっしゃる通り、事態は私が考えていた以上にはっきりとした形になってきました。しかし貴方がヤグアロン(国境の町)を越えるとポルトガル人との間に戦いが起きます。それがどんなに高くつくかはお分かりでしょう。あなたをよく知っているからこそ申し上げるのですが、どうかくれぐれも慎重になさって。」これを読むと、ベルナルディーナが政治に対して深い洞察力を持ち、リベラからも信頼されていたことがよく分かる。彼女自身の判断を求められることも多く、決してリベラとの間を取り持つだけの役割ではなかった。ただし、アナの場合と違って、もっと目立たない方法ではあったが・・・。

親友でもあった二人は全く違ったタイプの女性だったが、共通するのは尽きることのない母性愛と身を犠牲にした献身であった。家を守り、窮乏に耐え、政治に協力し、寄付を募り、負傷者を手当てし、革命に参加した。そして他にも、同じように働いた多くの女たちがいた。古い政治制度が終わりを告げ、社会が大変革を遂げる暴力的な時代、女性も傍観者ではいられず、自ら行動しなければならなかった。『大戦争』の後、ラバジェハとリベラは和解し、共に三頭政治を担うことになったが、相次いで亡くなる。ほとんど同時に結婚したふたりの女性は同時に未亡人となった。

(いとう・しげこ)